交点のグリーンランド—自立、保全、同時代性の否定

はじめに

グリーンランドは、今からおよそ5,000年前に、極東ロシア・チュコトカ半島を出発し、東へと歩みを始めた遺伝子集団＝パレオ／ネオ・エスキモーの終着地だった（図1）。同時に、スカンディナヴィアからグリーンランドへと新たな地平を求めた10世紀のノース人および18世紀の宣教師団（デンマーク＝ノルウェー同君連合の出身者）の目的地でもあった（図2）。エスキモーとスカンディナヴィアの人たちの合流によって育まれた農耕、放牧、海生哺乳類の狩猟を基盤とする文化的景観——人間と自然環境との交流によって育まれた景観——は、2017年に、ユネスコ世界文化遺産に登録された。

2023年8月、私たちは、この＜合流＞の輪郭を、通時的且つ分野横断的に考えるための書籍『グリーンランド—人文社会科学から照らす極北の島』を藤原書店より刊行した（画像1）。私たちの関心は、グリーンランドが、同じ遺伝子ルーツを持つチュコトカ半島・アラスカ・極北カナダに居住するエスキモー（社会）に比して、西＝エスキモーと東＝非エスキモーの要素が対称性を維持しつつ混淆（hybrid）していると、先行研究で指摘されてきたところにあった。東と西の対称性という論点は、グリーンランドが、アラスカやカナダと「違う」ことを説明する中心的な視角になってきた。にもかかわらず、このことを探求する試みは、十分な蓄積を見ていないことも指摘されてきた（Sonne. *Worldviews of the Greenlanders.* 2018）。

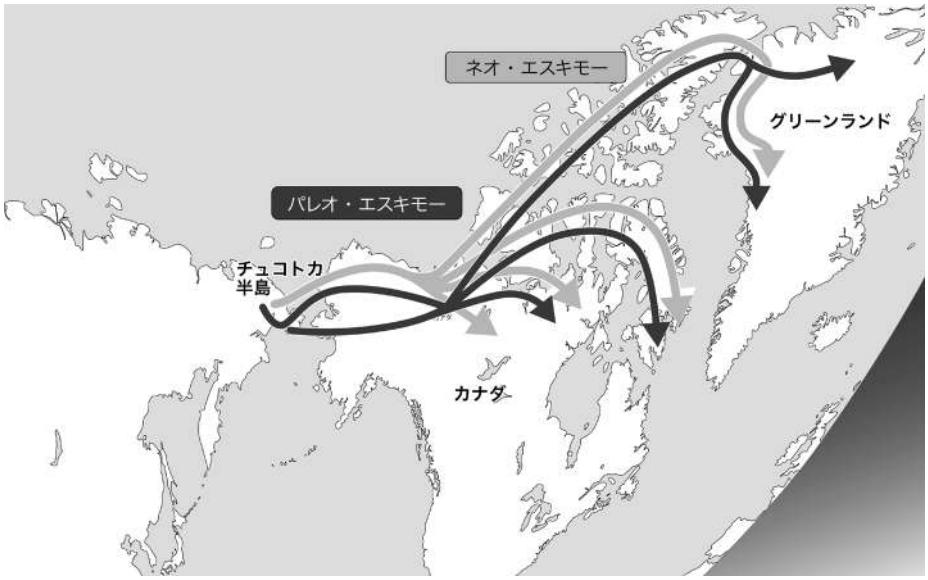

図1

東と西の対称性

では東と西の対称性とは何を意味しているだろうか。いくつか論点がある。ここでは、グリーンランドの混淆を理解する際に、しばしば持ち出されてきた＜言葉の活力＞について触れておきたい。

グリーンランドの公用語は、グリーンランド語である。グリーンランド語は、チュコトカ半島からグリーンランドへとひろがった東エスキモー語を構成する言語の一つである。グリーンランドの人口56,225（2019）のうち、グリーンランド語の話者は約5万人である。この話者数は、東エスキモー語の話者数全体の6割近くを占める。こうしたグリーンランドの言語状況は、エスキモー語を話せる人がもういないか、いても高齢者だけの他のエスキモー社会の現状とは大きく異なっている。アラスカやカナダのエスキモー社会では、植民地化以降、西洋の世界観への斉一化が大なり小なり強権的になされてきたことで、エスキモー語を含む諸実践の「根こそぎの崩壊」が起こり、両者のバランスをどのようにとっていくのかが「切実な問題」となってきた（宮岡『エスキモー』1987）。

この違いはなぜ生じたのか。私たちは、風俗・習慣等をテクスト化した集合としての民族誌の検討を含め、研究の積み上げがほとんどなされてこなかったグリーンランドを対象に、国際共同研究を実施し、その解法の探究を試みた。その結果、1953年にグリーンランドが脱植民地化し、デンマークの一地方になるまで継続されたデンマークの植民地経営は、①グリーンランド社会を自立させ、②保全の対象とした上で、③急速な近代化によってグリーンランドの「伝統社会」が変質することのないよう、グリーンランド内のいくつかの地域を植民地化から意図的に切り離すこと（同時間性の否定）を中核的要素とすることで、維持・展開してきたと暫定的に結論付けた。アラスカ等における「根こそぎの崩壊」が、殺戮や強制移住等、排除に力点を置く「入植者植民地主義（settler colonialism）」の産物として説明される傾向が強かったことを鑑みれば（ダンバー＝オルティス『先住民とアメリカ合衆国の近現代史』2022）、グリーンランドにおける植民地経営は、異なる性状を示しているように見えた。①～③について、簡単に振り返りたい。

1. 自立

グリーンランドは、1721年にデンマーク＝ノルウェー同君連合（1814年からデンマーク）の植民地になった。このとき、グリーンランドのエスキモー（特にハンター）には、①自立することが要請された。デンマークは、ハンターが、食物供給等の観点からデンマークに依存してしまう事態を回避しようとしていた。それは、植民地運営のコストを出来得る限りおさえながら——植民地経営を圧迫しないように——、セイウチやイッカククジラの牙、ホッキョクグマの毛皮など、グリーンランドで入手できる豊富な自然資源を調達しようとしていたからである。それゆえに、ここでいう自立とは、狩猟に生活基盤を置く「伝統的」な自給自足型のグリーンランド社会として独り立ちすることを意味していた。もちろん、経済的搾取という側面は看過できない。さらに、排除の論理がデンマークの植民地経営を構成する要素から省かれていたと見ることも素朴にすぎるだろう。しかし、それが、極北カナダやアラスカにおける植民地経営と同質のものとして処理することにも、一定の留保を付ける必要があった。

確かに、極北カナダやアラスカも、グリーンランドと同じように、自然資源を調達する場として位置付けられてきた。それゆえに、ハンターとの協業も避けられなかった。しかし、当該域の先住民に対する施策は、先住民の（搾取にではなく）排除にプライオリティを置いてきたことを先行研究は指摘する。それは、集団殺害や土地収奪をはじめとする排除の論理に力点を置くものだった。

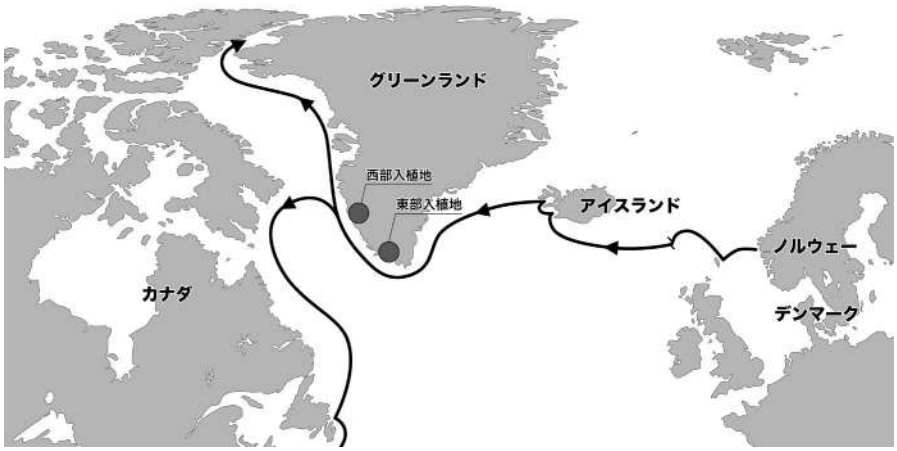

図2

2. 保全

もちろん、搾取と排除の境界線を同定することは、難しい。しかし、デンマークのグリーンランド植民地経営の構成要素の一つとなってきた、グリーンランド社会の②保全という観点は、グリーンランドの植民地化が、排除とは異なるベクトルで展開していたことを説明するかもしれない。デンマークは、植民地化によって狩猟社会としてのグリーンランドが変質することのないよう保全し、安全な場所に格納することを目指した。

では、どのように保全を達成しようとしたのか。それは、同時代的に編まれた数多の民族誌を参照した植民地経営だった。デンマークは、グリーンランドの植民地化に際して、古き良き時代のグリーンランド社会、すなわち狩猟・漁労に立脚した自立社会を維持する手がかりとして、民族誌に記録されている伝統的な猟師を理想化し、そうした存在を核とする社会を作り上げることを目指した。伝統社会と文化の構造の調達先として参照されたのは、同時代を生きながらも、西部グリーンランドに比して植民地化の影響がまだ十分に及んでいなかった北部や東部グリーンランドのエスキモー、および彼らの生業活動だった。スカンディナヴィア出身の観察者らは、植民地化され、近代化されていく西部グリーンランドの状況を把握しつつ(場合によっては憂いつつ)、北部や東部に遠征(タイム・トラベル)し、彼らのレンズに映る景色をテクスト化した(画像2)。テクスト(の集合としての民族誌)は、植民地経営者が参照し、西部の近代化がどの程度進んでいるのかを判断する指針として機能した。

3. 同時代性の否定

つまり、東部・北部グリーンランドは、③同時代性の否定＝西部グリーンランドとは切り離された時間の中に生きることが要請された。このことからも明らかなように、観察する側＝スカンディナヴィアの人たちと、観察される側＝エスキモーとの関係は極めて非対称だった。この統治の形は、デンマークとグリーンランドの結節の基底として、その後の両者の関係を方向付けるものとなっていった。

東部・北部に植民地化の影響がおよぶのは、植民地化計画の後期である。布教は19世紀、貿易は20世紀のことである。デンマークがこれらの地域を1921年に正式に自国領に含めたからである。同年は、1721年にグリーンランドを植民地化した際の中心人物、イーエゼ(Hans Egede,1686-1758)の上陸から200年の「節目」だった。この節目に、デンマークはグリーンランド全域の統治権を宣言したのである。

画像1

おわりに―比較エスキモー史研究に向けて

本稿で概観したデンマークによる植民地経営の実質は、記述的に推論――推定を重ねながら現実世界を記述――した先に明らかになったことである。ここで導出された事実への理解は、他のエスキモー社会との事例を等価に扱う、いわゆる比較の――関係的(relational)な――視点をふまえることで、より深度を深めていけるだろう。

では、図1の範疇で、エスキモー社会の動態を比較の視点から捉える研究はあるだろうか。管見の限り、多少はある。先行研究の多くは、比較の視点に力点を置くことがほとんどないまま、各国史の文脈で知見を蓄積するものだったが、その数少ない研究として、Charles Campbell Hughes et al. (1965). "Under Four Flags"., David Damas ed. (1985). *Handbook of North American Indians.*, Bruce Trigger ed. (1996). *The Cambridge history of the native peoples of the Americas.*の3点は、比較に力点をおいた優れた研究として位置付けられる。しかし、刊行年が古いことに加えて、北米中心――すなわち英語圏中心の研究であり、扱われる地域には偏りがあった。この点でIgor Krupnik ed. (2016). *Early Inuit Studies.*は、最新の、且つケースセレクションの濃淡が少ない必読の研究だが、エスキモー研究(イヌイット研究)に寄与した科学者に焦点をあてつつ、その研究史の探究に留まるものであることには留意したい。

私たちの次の目標は、図1の時空間を対象に、高橋編2023＝画像1の暫定的な成果を基点としつつ、それを、各国史の枠組みの中で積み上げられてきた、他のエスキモー研究の蓄積と縫合することで、これまで研究の蓄積がほとんど見られなかった、比較エスキモー史研究の進展を試みるところにある。

画像2

高橋美野梨
北海学園大学法学部政治学科准教授。博士(国際政治経済学)。近著に『グリーンランド―人文社会科学から照らす極北の島』(編著、藤原書店、2023), *Borders in East and West: Transnational and Comparative Perspectives* (Co-authored, Berghahn Books, 2022), "Inklusion, imagepleje eller nødvendighed? Basepolitik i Grønland og politisk kultur i Danmark" *(Økonomi & Politik,* Vol.94, No.2, 2021*), Exploring Base Politics: How Host Countries Shape the Network of U.S. Overseas Bases* (Eds., Routledge, 2021).など。